

開催地名	山梨県丹波山村
開催日時	令和7年9月1日(月) 18:00 ~ 19:30
開催場所	丹波山村役場
語り部	臼井 久 (山梨県都留市)
参加者	80名
開催経緯	9月1日防災の日ということで今年は臼井様をお迎えし、色々な角度からお話いただき防災についての意識向上をしてもらいたいと思い開催した。
内容	<p>都留市ではWHOが推奨する国際認証制度、県内初の認証取得されたセーフコミュニティ事業を取り入れている。</p> <p>基本理念として「事故などは起こるところは決まっている」</p> <p>ここは危険な場所だな、ここでいつもつまずくな、そういった事を事前に見つけて察知して、原因を分析することで予防をしようというのがセーフコミュニティである。</p> <p>2015年に防災計画推進会を発足。10年以上活動を継続している。</p> <p>「防災まちづくり大賞」を受賞、表彰対象となった活動の一例：近隣住民の行方不明者捜索。3日間、夜明けから日没まで山中を捜索。消防団員の献身的な姿勢が印象的だった。</p> <p>私たちの地区は3つの自治体に分かれており、それぞれに自治会長・自主防災会長が存在。毎年交代するため、継続的な防災活動が困難であった。自主防災会は避難所単位で運営されており、3つの避難所を共同で管理する必要がある。自主防災会長の中に防災士資格を持つ者が複数いたことがきっかけで、自然発生的に4人の防災士が集まり、話し合いを開始。</p> <p>都留文科大学の先生を招いて地域の成り立ちや災害史を学ぶ機会を設けた。</p> <p>ハザードマップの活用を推奨。紙の地図はしまい込まれがちだが、スマートフォンでNHKの「ニュース防災」アプリを使えば全国の情報を確認可能なので活用を推奨する。</p> <p>少子高齢化は防災の枠を超えた社会課題。かつては自宅で葬儀を行っていたが、今はホールなどに移行し、助け合いの文化が希薄になっているのを感じている。</p> <p>国勢調査の結果から、一世帯あたりの人数が多く、家族単位の暮らしが根強く残っている。</p> <p>消防団員は公務員と誤解されがちだが、実際は無報酬で地域のために活動している。報酬が出るのは火災対応や行方不明者の捜索など、限られた場面のみ。</p> <p>地区防災計画書は役場の要請により作成。住民や自主防災会長と協力し、約1年かけて完成。ハザードマップを活用し、土砂災害警戒区域などを家ごとに把握できるよう工夫。地形を三次元的に捉え、避難所の位置や安全性を検討。</p>

地震災害を想定し、地域を4組に分けて一時避難場所を設定。防災マップ作成のため、住民とともに地域を歩き、危険箇所や消火栓などを確認。年3回の避難訓練を実施し、住民同士の確認と連携を強化。

また、都留文科大学から譲り受けた雨量計で地域の降雨量を観測。テレビの情報より1割以上多い降雨が確認され、地域特性を実感した。

LINE公式アカウントによる情報発信、災害時の情報発信に活用。

グループLINEではなく公式アカウントを使用することで、個人情報の保護と安心感を両立。要支援者名簿の作成には慎重な姿勢。地域住民の助け合いによる支援を重視。

「名簿よりも近所の理解と協力が重要」との考え。都会と異なり、地域のつながりが支援の基盤となっている。高齢者や障がいのある方が避難できるよう、家族や近隣住民が協力する体制が重要。「足が悪いのか、耳が聞こえないのか、地域の皆さんは把握している」と認識している。一時避難場所に全員が集まることは難しく、「5人家族なら5人がわかっていればいい」との考え。名簿に頼るのではなく、近所の把握力と日常の声かけが鍵。向こう三軒両隣作戦により、近隣住民が互いに避難確認を行う。訓練ではリストを作成するが、本番では使わない前提で「だから訓練しているんだ」と強調している。

通電火災訓練として、ブレーカーを落とす（実際には落とせないのでブレーカーにシールを貼る）訓練も実施している。

一日の中で最も長く過ごす部屋として、寝室の安全対策が重要。避難用の靴を枕元に置く、重い家具を頭上に配置しないなどの工夫。家具の転倒防止、耐震診断・修理、防災ベッドの導入など。

一時避難場所は「顔を合わせる広場」であり、備蓄はない、避難所では防災かまどや備蓄倉庫の整備が進められている

大雨の時の垂直避難は最後の手段。五感を使って危険を察知し、率先して避難することが重要である。子どもたちは大人の行動を見て学ぶ。率先して避難することが次世代の命を守る

防災計画推進会は住民主体の活動を支援し、毎年意識の向上を図っていて、「防災棚卸」と題して倉庫の中身をすべて出し、賞味期限や不足物資を確認、自主防災会の倉庫に分散して備蓄する方法も検討。一部の人だけが頑張るのではなく、地域全体で取り組む仕組みづくりが必要である。

	<p>コロナ禍では感染症対策を意識したテント泊訓練を実施し、宿泊体験を通じて災害時の生活を具体的にイメージしてもらった。</p> <p>災害時には下水道が機能しなくなる可能性があるため、簡易トイレの備蓄が不可欠であり一人ひとりが最低限の備えを持つことが求められる。地域で共同購入を呼びかけるなど、普段からの準備が重要。地域の医療機関と連携し、災害時の対応訓練を実施している。</p> <p>住民の理解と参加を促す工夫が、地域防災力の向上につながるのである。</p> 
開催地より	<p>本日は防災の日でもあり、今日聞いたお話をご家庭で話し合い防災について語っていただきたい。</p>